

## 前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。  
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウド・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。

あたかも、改変された世界から排除されるように……。

〈ブレイクス〉の脅威に立ち向かう事を決めた、やみひめ達。

クラウドは〈機獣少女〉としての適性を認められ、〈ジェノクラウドエ〉と呼ばれた機獣のコアの欠片かけらを納められたMBデバイスを愛機に選んだ。

演習場に移動し、その起動試験を行ったクラウドは、MBジャケットの展開に成功する。だが、その姿はクラウドが〈カタストロ〉に意識を奪われていた時の姿、そのままだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

惑星ゼヘナは荒野が多い。

未開拓というよりは、開拓しようという発想がなかったのだろう。かつて存在した機獣を使った戦争に明け暮れていた時代から、必要十分な土地があればよしという考えだったのか、手付かずになっている部分が多い。

やはり戦争に明け暮れていたためか、考古学的な研究にも積極的でなかったため——単純に余裕がなかったのかもしれないが——手付かずになっている古代の遺跡や、未踏の地は多い。

それは機獣を使わなくなった今でも変わっていない。大陸の大部分を占めているのは未だに荒野で、開拓の手を伸ばそうという動きもない。ひよつとしたら、ゼヘナの人々には、遺伝子レベルで開拓に対する禁忌のようなものが刻まれているのかもしれない。

広大な荒野は機獣が駆け抜けるべき戦場。

その聖域を汚してはならない。

そんな風に考えるのは、ロマンチストが過ぎるだろうか。

『——ベアトリーチェ！ 援護、まだ!？』

不意に悲鳴じみた怒鳴り声が聞こえ、カナコ・T・シングウジは物思いに耽るのをやめ、目の前の現実を意識を向けた。

四人の少女達が戦っている。

正確には、一人の少女に対し、残りの三人がチームを組んで戦っている。

カナコは戦闘の余波を受けない、かなり離れた位置でその様子を眺めていた。

『お待たせ！ とっておきのやつ、いつちやうよー!』

カナコのMBデバイスを通じて、新たな声——通信が届く。その声は、別の通信が混線したのではないかと思わせる、戦場には似つかわしくない明るいものだった。

直前の声の主である、先ほどベアトリーチェと呼ばれた少女が、右肩に担いだ長方形の物体を構えている。カナコはそれに見覚えがあった——というか、自分に向けて発射された事があった。

ミサイル発射装置だ。

『ネーメズイ・フレッチェ——罪に罰を!』

ベアトリーチェの言葉が終わると、それが引き金だったように、発射装置の右から順に一基ずつ、時間差でミサイルが発射されていく。機獣を使っていた頃は当然のようにあった兵器らしいが、機獣少女の装備には存在しないため、まだ物珍しい。

だがそれも、カナコが傍観者として眺めていられるからこそその感想だ。その脅威に晒される場所にいる者達にとっては、恐怖でしかないだろう。

ベアトリーチェが撃ったミサイルの弾頭部分の装甲が弾け、無数の球形弾が顔を見せると、指向性の散弾地雷の如く地表に降り注いだ。カナコが以前に見た際は小型の榴弾だったが、弾頭の種類は換装可能のようだ。

恐らくは三桁に届く金属の飛礫による豪雨は、暴力以外の何物でもない。

『——ひいひいひいひいッ!?!』

『ベアトリーチェさん！ 味方を巻きこまないでください！』

『えっと………てへ☆』

『てへ☆——じゃないよ！』『てへ☆——じゃありません！』

阿鼻叫喚の地獄絵図というのは、この状況を言うのかもしれない。

無数のベアリング弾によって地表は抉られ、その威力に巻き込まれそうになった味方のはずの少女二人——やみひめとツバキは憤慨し、この状況の張本人であるベアトリーチェは悪びれる様子がない。

しかし——

「無傷——ね」

舞い上がった土煙が晴れると、ベアリング弾の雨の中心にいた少女は、悠然とその姿を現していた。

黒いドレスのようなMBジャケット。背には一対の巨大なウイング・ユニット。両手には巨大な爪のようなシルエットを構成する、手甲型のMBデバイス。攻撃的な禍々しさと、研ぎ澄まされた美しさの両方を感じさせる、絶妙なデザインだとカナコは思う。敵には脅威を与え、味方には勇気を与える、見るものの立場によって印象が変わる姿だと。

しかし、それ以上に気になるのは、装着者の少女自身だ。

クラウ・P・ブラン。

地球から転移して来た異邦人の一人。

《機獣少女》としての経験は素人同然のはずだが、それにしては自分の力の使い方を理解し、実際に使いこなせている。

問題があるとすれば——

「——ッ！」

カナコは咄嗟に右に跳んだ。それはほとんど反射的な行動で、無意識に近いものだったが、どうやら正解だったらしい。一瞬前までカナコが立っていた地面が破裂し、大量の土砂が弾け飛んだ。

数メートルの距離を置いて着地し、カナコは破裂した地面の中心地に立つクラウの姿を認め、嫌な汗が出るのを感じた。

先ほどまでクラウが立っていた位置から、ざっと二百メートル以上は離れている。その距離を一瞬で詰めた爆発的な加速方に、戦慄すら覚えるほどだ。

だが、同時に頼もしさも感じていた。

クラウが〈機獣少女〉として戦ってくれば、戦力としては申し分ない。

そのためにも――

「正気に戻ってもらわないとね」

「――」

カナコと相対するクラウの表情には、感情と呼べるものが浮かんではなかった。ツバキから話としては聞いていたが、彼女が〈カタストロ〉に意識を奪われていた時の状況が、まさに今のようだったのだろう。

原因は判らない。きっかけはMBデバイスの起動試験だが、〈カタストロ〉はやみひめによって分断されたと聞いている。

それが、なぜ？

「……まあ、どうでもいいわ」

余計な考えは頭から追い出す。考えたって判らないのなら、考えるだけ時間の無駄だ。

カナコは、自身のMBデバイスであるカタナ型の得物を構える。両手で柄を握り、剣先を相手の目に向ける、基本とも言える正眼の構え。

すつと、カナコの顔からも表情が消える。

その瞬間、彼女は自身を一振りのカタナに変えていた。

武器は考えない。

武器はしゃべらない。

ただ――敵を駆逐するだけでいい。

第二十二話

『ジュンスイデムクナルモノ』

〈L. C. ファクトリー〉が保有する演習場。その管制塔の管制室。

其処に、クラウ・P・ブランのMBデバイス起動試験を見守る者達がいた。

「MBジャケットの展開を確認っと」

演習場の様子を多方面から同時に観られるよう設置された、複数のモニターに映し出された映像を観て、ロゼット・コダールは満足そうに頷いた。

長い金髪と青い瞳の、妙齢の美女である。うら若い外見と穏やか雰囲気のため、こんな場所で白衣を着ていなければ、彼女が高名な技術者だと思っ者はいないだろう。

余談だが、こう見えて三十二歳である。

「クラウは本物の逸材かもしれないね」

「……………」

普段であれば多くの観測員が詰めているはずの管制室だが、この起動試験は届を出していない非公認なものであるため、この場にはロゼットを含め三人の人間しかいない。会話のきっかけになればとロゼットは言葉を発したのだが、その相手は返事をしない。ロゼット同様にモニターを観ているのだが、無視をしている訳ではなく、その映像に驚いているといった様子だ。

「アサト君、どうかしたの?」

「…………あの姿、見覚えがある」

ロゼットが不思議そうに訊ねると、アサトと呼ばれた少年が間を置いて答えた。身長や体格は成人男性とそう変わらないが、まだ幼さが残る顔立ちには、高校生らしいとも言えるだろう。

彼の名前は橘アサト。黒髪黒瞳は東方大陸人に多い特徴だが、彼は惑星ゼヘナの間ではなく、地球から来た異邦人である。

「え? でも、〈機獣少女システム〉は地球にはないんだよね?」

「〈カタストロ〉とかいうのに取り付かれてた時、たしか、あんな姿だった」

「クラウが〈カタストロ〉に…………?」

アサトに向けていた視線をモニターに戻す。そこには、先ほどと変わらぬ、黒いドレスを身に纏ったクラウの姿が映っている。背部には巨大な二対のウイング・ユニット。両手には、獣の爪を思わせる手甲。

禍々しくも洗練された、ある種、魔的なデザインである。

だが、その落ち着き払った無表情は、大人びた性格の彼女であっても、この状況には不自然に感じられる。

「それって、どういう——」

『——う……あ………うおあああああああああああああッ!?』

再びアサトに視線を向け、事の詳細を訊ねようとしたロゼットの問いかけは、スピーカーから発せられたクラウの叫びにかき消された。



クラウの姿が変わった。

実際には衣装が変わっただけなのだが、丈の長い黒いドレスと、背中から突き出るように生えた一对の巨大なウイング・ユニット、そして獣の爪を思わせる手甲を身に付けた事により、シルエットはがらりと変わっていた。

MBジャケットの展開に成功したのだ。両手の手甲は明らかに武装なので、これが彼女のMBデバイスなのだろう。

「クラウ……?」

その姿を見た流遠るとおやみひめは、緊張した面持ちで友人の名前を呼んだ。

長い黒髪をポニーテールにした、可愛らしい少女だ。琥珀アンバーのようなだいだい色の瞳は、ツリ目がちだが攻撃的な印象はなく、彼女の快活な性格によく似合っている。

小学六年生相応の小柄な体躯たいくを包むのは、黒い和服である。布面積は広いのに、妙にはだけており、肩や脚が露出する様は、年齢の幼さを差し引いても煽情的だ。

これが彼女のMBジャケットであり、右手に持ったMBデバイス（ヤタガラス）も、すでに黒い剣の形態になっている。

〈機獣少女〉。

かつて機獣と呼ばれた存在、その力を借りて戦う少女達の総称であり、やみひめもその一人である。

彼女の場合、なぜかMBジャケットを展開すると、狼のような耳と尻尾が生えるオマケ付きだが。

『——やみひめさん。ブランさんのあの姿は……』

〈ヤタガラス〉の通信機能を介して、ツバキの声はやみひめに届く。彼女もまた、クラウのMBデバイス起動試験に立ち会ったため、臨戦態勢で演習場にいる。緊張を含んだこわね声音がらして、ツバキもやみひめと同じ不安を感じているのだろう。

二人とも、地球でクラウと戦った経験がある。〈カタストロ〉に意識を奪われての事だっ

たが、その際の彼女の姿が、今まさに目の前で再現されていた。

「うん……地球で見たのと同じだよね」

『やはり、私の記憶違いではありませんでしたか』

「そういえば、クラウのMBジャケットが、どこかの会社の製品にデザインが近いって言うってたよね？」

『はい。コダール社の『ロゼット』というブランドに近いと言いましたね。お気付きかと思いますが、コダール社というのは、〈L. C. ファクトリー〉を含んだ企業の名前です』  
ツバキの言葉に、やみひめは納得した。

〈L. C. ファクトリー〉の創始者ロゼット・コダール。ファミリーネームがそのまま社名となり、ファーストネームは〈機獣少女〉の戦装束である、MBジャケットのブランド名となったのだ。

「じゃあ、やっぱり〈カタストロ〉は『ロゼット』のMBジャケットを参考にしてたって事……でいいのかな？」

やみひめの考えはこうだ。なんらかの理由で『ロゼット』のMBジャケットのデータを持っていた〈カタストロ〉が、それを完全に再現してクラウに装着させていた。だから、オリジナルのデザインもまったく同じで、クラウが今装着しているMBジャケットが、そのオリジナルなのだ。

『だとしても、まったく同じに再現出来るものなのでしょうか？』

ツバキの意見はもつともだ。

むしろ、やみひめ自身も、そう思っている。〈機獣少女システム〉の事は判らないが、データがあれば簡単に再現出来るものだとも思えない。判らないのは〈カタストロ〉の能力も同様ではあるのだが、データを持っていたという前提すら仮定の話なのだから。

『——確認するけど、地球で彼女が、今まったく同じ姿であなた達と戦った。そういう事でもいいの？』

二人の会話を割り込んだのはカナコだ。彼女もまた、演習場にいるメンバーである。通信は全員に届くよう設定してあるので、やみひめとツバキの会話から推測したのだろう。

『——わたしは少ししか見てないけど、あんな姿だったと思うよ』

カナコの問いに答えたのは、演習場にいる最後の一人、ベアトリーチェだ。彼女が地球で姿を見せたのは〈カタストロ〉がクラウから分断されて逃走しようとした直後だったが、それ以前から近くで見ていたのだろう。

『やみひめさん、やはり様子がおかしい気がします。ブランさんに声をかけ——』

ツバキの言葉が途中で止まった。

呻き声うめのようなものが聞こえたからだ。

『え？ なに？』

『声……？』

ベアトリーチェだけでなく、三人より距離があるカナコにも聞こえているようだ。聞  
者の不安あおを煽あおるような、それでいて神経きんじに障さる、地の底さから響きいているのではないか思  
わせる——声。

「——う……あ……うおあああああああああああああああッ!？」

黒いMBジャケットを身に纏まとったクラウの、少女の声帯まから発せられたとは思えない絶  
叫こたが、演習場こたに木霊ました。



気が付くと、其処そこは図書館のような空間だった。しかも、市民図書館レベルではない、  
創作の中に登場するような、大図書館とでも呼ぶべき規模の場所だ。壁はすべて本棚で埋  
まり、内側にも本棚が整然と並んでおり、巨大なドミノ倒しなのではないかと錯覚しそ  
うになる。大量の本棚が並んでいるにも関わらず、狭苦しいと感じないのは天井が高いせい  
もあるが、それだけこの空間が広大という事なのだろう。

「……すごい」

その光景に、クラウ・P・ブランは思わず感嘆の吐息を漏らした。

長身の少女である。見た目通りなら高校生くらいに見えるが、実際にはまだ小学六年生  
で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

一部に白いメッシュが入った長い黒髪と真紅の瞳から、パンキッシュな印象を受けるが、  
実際には至っておとなしい、読書好きの少女だったりする。

周囲からは寡黙なクールビューティだと思われるが、そう見えただけで、実際に  
は結構ぼんやりしている。

なんというか、ギャップの多い少女である。

「……………」

今も、表情にこそ出していないが、大量の本棚を眺ながめてテンションが上がっている。すぐ  
にでもお気に入りの本を探して、読書に没頭したいところなのだろう。

だが、クラウはその衝動を抑え、冷静になろうと努力する。

自分は今まで、何をしていた？

演習場でMBデバイスの起動試験をしていたはずではなかったか？

MBデバイスを掲げ、教えられた起スターティング・ヴォイス動言語を唱えたまでは覚えている。それから——どうなった？

判らない。

気付けばこの大図書館にいたので、今はその直後なのではないかと推測する。

「……………」

やはり判らない。

ならば、とりあえず出来る事からやればいいのか？

例えば——気になる本を読んでみるとか。

そうだ。これは現実逃避ではないし、欲望に忠実になった訳でもない。今、出来る事をやろうとしているだけ。

そう自分に言い訳——いや、言い聞かせて、クラウは一冊の本に手を伸ばす。

「——それは読まない方がいい」

「!？」

唐突に背後から聞こえた声にびっくりと反応し、クラウは振り返った。

すると、本棚の陰から上半身を覗のぞかせた女性と目が合った。

よくパロディなどでも使われる、昔のドラマが元ネタの光景。

「……家政婦、さん？」

クラウが目にした女性は、まさにそういう状態でこちらを見ていた。



硬質な物体が弾はじき合う、聞く者によっては神経をすり減らしそうな音が響く。それも、何度も。

黒いドレスの少女が両手の爪を繰り出し、魔女のような格好の少女が両手の得物えもので応戦している。魔女が持つ物と言え魔法の杖か箒ほうきが相場だが、なぜか彼女は二振りの剣で武装していた。

「ちょ!?! ちょ!?! ちょ!?!」

高速で繰り出される爪の連撃を、ベアトリーチェ・ファフロウは両手の剣で、なんとか

捌きはいていく。

見た目通りなら十二、三歳くらいの少女である。茶色のショートヘアと、猫を思わせる黄玉トパールのような大きな瞳。その頭部には猫を思わせる耳が生えており、腰の下の方には同様の尻尾も見える。

普段は悪戯いたずら好きの子猫のような性格なのだが、今はその表情に余裕の笑みは見られない。

だが、それも当然だ。彼女を襲う爪の連撃は、迎撃に失敗すれば身体からだの部位が斬り飛ばされそうな威力で、笑みを浮かべる余裕などない。そもそも、ベアトリーチェは接近戦が得意ではないのだ。

しかし、そんなベアトリーチェの都合など、爪の持ち主には関係がない。両手の手甲から伸びる四本ずつの鋭い爪による連撃は速度を上げ、押し切ろうとしてくる。

両手の爪と両手の剣。

数の上では互角だが、手数で言えば圧倒的に爪の持ち主が多く、ベアトリーチェは防戦一方である。

よくよく見れば、ベアトリーチェの剣は小太ショート・ブレイド刀で、左右で少しだけ刃の長さが違う。右が約五十センチ、左が約四十センチほどで、小柄な少女にもよく馴染んでいる。カナヤ長ロング・ソード剣と比べれば有効範囲が狭く、より敵に密着する事を求められる武器だが、小回りが利く分、防御にも使いやすいという利点がある。こうして怒涛どたごうの連続攻撃ラッシュを凌しのげているのも、ベアトリーチェがその利点を活かし、防御に徹しているからだ。

とはいえ、防戦一方の状況が続けるといえるのは、精神的にかなりの負担である。

「ちよつと!!? もう無理!!?」

巧たくみに両手ショート・ブレイドの小太刀で応戦していたベアトリーチェが、たまらず悲鳴を上げる。すると――

「――ッ!?!」

黒いドレスの少女――クラウドが急に後方に跳び、入れ替わるように、小柄な少女がベアトリーチェの眼前に着地した。

「ふへえ……助かったよ、ツバキちゃん」

クラウドの猛攻から解放されたベアトリーチェが、尻餅もつちをつくように地面に座り込んだ。ベアトリーチェに目配せで答え、ツバキと呼ばれた少女がクラウドを追撃する。

年齢はベアトリーチェよりいくつか下だろう。明らかに小学校の高学年といった外見で

ある。だが、その表情に怯えはなく、身のこなしも訓練された戦士のそれだ。  
ツバキ・タカチホ。

〈難攻不落〉の異名を持つ、名うての〈機獣少女〉である。

左側頭部でサイドポニーにしたセミロングの黒髪をなびかせ、蒼玉のような澄んだ青い瞳でクラウドを見据える。

「〈カグツチ〉、以前の彼女と相違点はありますか？」

和服とミニスカートを組み合わせたような赤い衣装をはためかせ、右手に持った機械的な意匠の薙刀——愛機であるMBデバイスに問いかける。

『——ふむ。おおよそだが、地球で戦った時と同様の戦闘能力だな』

時代がかった女声を思わせる機械音声でツバキの問いに答えたのは、〈カグツチ〉を介して通信を聞いた誰か——ではなく、〈カグツチ〉自身だ。本来、MBデバイスに人工知能の類は搭載されておらず、会話を行う機能はない。これは〈カグツチ〉に納められたコアの欠片が、特殊な機獣のものである事に端を発するのだが、ツバキも詳細は知らされていない。

正確には、〈カグツチ〉自身が記憶喪失で、外部の記録も失われているため、過去については知りようがないのだ。

「そうですか。では、油断は出来ませんね」

『そういう事だ』

だが、ツバキはそれでよかった。興味はあるが、〈カグツチ〉の素性など、今の自分達にとってはどうでもいい。過去がどうあれ、今は最高のパートナーなのだから。

ベアトリーチエからバトンタッチする形で、ツバキがクラウドに応戦する。ベアトリーチエは接近戦が得意でないため防戦一方だったが、ツバキは万能型らしく、基本は防御に徹しつつ、要所所で反撃を放ってクラウドと一進一退の攻防を見せている。

何かに特化していない分、ツバキは攻撃・防御・速度・技術のすべてが高水準なのだ。それを器用貧乏と笑う者はいない。笑われる程度の水準であれば、二つ名など付けられない。

〈難攻不落〉は伊達ではないのだ。

派手さはないが、堅実な戦い方で確実に勝利する。それは真面目で品行方正なツバキらしい戦い方だと、やみひめは思う。

そんなツバキと一緒に戦える。信頼してもらえろ。



「……………」

やみひめが右手の人差し指をクラウに向けると、背後の機剣がすべて同時に動いた。空中に直立していたそれらが、くると切っ先を標的に向ける。

「行って！」

主の号令の下、模倣された白い機剣が、一振りずつ連続で撃ち出されていく。まるで、見えない弓兵が矢の代わりに放っているかのように。

「……ッ！」

クラウは背中に展開させたウイング・ユニット内のスラスターを噴かせ、一瞬でその場を離脱。目標を見失った機剣は次々と地面に突き刺さっていく。

しかし、どういう原理なのか、地面に突き刺さった機剣は自力で空中に浮かび上がり、即座に方向転換すると、再び目標を追尾した。

「？」

背後から追尾してくる数本の機剣。正面からも、更に新たな機剣が撃ち出される。

逃げているも罫が明かないと判断したのか、クラウは着地すると、連続で飛来してくる機剣の群れを、両手の手甲で次々に弾き飛ばしていく。

しかし、模倣品とはいえ、オリジナルの（カグツチ）と同様の質量がある。それが高速で向かってくるのだから、運動エネルギーはかなりのものだ。徐々に迎撃の動きは鈍り、やがて再び、クラウは背中の機械仕掛けの羽根を広げ、その場を離脱した。

「追って！」

やみひめが命じるまでもなく、機剣は空中に身を躍らせると、列を成してクラウを追尾していく。戦闘機の編隊を思わせる、綺麗な縦列飛行だ。

「……………」

やみひめは違和感に首をひねる。何かがおかしい気がするのだが、それが何か判らない。すると、機剣の群れから逃げるクラウが、後方を確認するような仕草をして——加速した。

そこで違和感の正体に気付いた。クラウのスピードが記憶のイメージより遅かったのだ。加速して振り切るつもりだろうかとも思ったが、違う。

加速して機剣の群れから距離を稼いだクラウは着地し、スライディングしながら方向転換。一直線に迫る機剣の群れを正面に捉える。

そして——閃光が奔った。

クラウが放った荷電粒子砲の光だ。

光の一閃は、縦列を成していた機剣の群れをまとめて消滅させると、そのまま天に向か

い、やがて霧散した。

暴走したクラウドと、彼女を押さえようとしている三人の戦いを、後方から見守る少女がいた。

年齢は十六、七歳くらいに見える。少女らしい幼さは残しつつも、可愛いというよりは綺麗だと評されるであろう容姿だ。静謐な印象に加え、長い黒髪と、黒瑪瑙のような黒い瞳の組み合わせは、東方大陸女性の清楚な美しさを表現した『大和撫子』に相応しい。カナコ・T・シングウジ。

その身に纏ったMBジャケットが示す通り、彼女も〈機獣少女〉である。白い振袖と黒い袴はかまに身を包み、カタナ型のMBデバイス〈スサノオ〉を手にして佇む姿は、戦乙女バルキリーというよりサムライだろう。

「……………」

しかし、悠然と眼前の光景を見守るカナコは、内心穏やかではなかった。色々と理解が追いつかない。

ツバキの実力はよく知っている。ベアトリーチェに関しても、彼女との模擬戦を経験しているので、能力も含め知っている。

問題は地球から来た二人である。

まずは流遠るとおやみひめ。

MBデバイス・MBジャケット共に、〈機獣少女システム〉の規格から大きく外れているようには見えない。

だが、あの能力は何だ？

背中の六枚の羽根は制御装置なのだろうが——航空力学に詳しくなくとも、あれが飛行のためのものでない事は判る——あんな装備は聞いた事もない。

機力を編きりよくあんで生成したカタナを投擲とうてきする技はカナコも使える。だが、それは単なる機力の塊かたまりにすぎない。カタナだという認識がそう見せているだけで、実際には集束されたエネルギーでしかない。

しかし、やみひめが現出させた十数本の機剣は違う。機力の塊ではなく、実体を持った物質に見えた。

クラウド・P・ブランもそうだ。

〈機獣少女システム〉自体はコダール社の製品に似ているが、あの戦闘能力スベックは何だ？ 爆発的な加速性能はまだいい。装着者の技量で——それでも苦しいが——説明がつく。

だが、先の光線は初めて見た。

（大昔、機獣を兵器として戦争に使っていた時代に、ああいう武装があったらしいというのは聞いた事があるけど……）

そうであれば、過去の戦争がどれだけ激しいものだったのか。

そして、その機獣の力を、欠片<sup>かけら</sup>であつても使っている自分達の存在とは何なのか。

「……………」

それらを思い、カナコは背筋に薄ら寒いものを感じた。



大図書館に並ぶ無数の本棚。その陰から『目撃者スタイル』をやめて出てきたのは、家政婦——ではなく、細身のダークスーツに身を包んだ女性だった。

見た目通りなら二十代半ばくらいだろうか。一部に白いメッシュが入った、肩口にかかるくらいの黒いセミロングと、瞳の色は真紅という目を引く容姿から、パンキッシュな印象を見る者に与える。美人な事に加え、クールな雰囲気でもあるので、余計に近寄りがたく感じてしまう。

クラウは、その女性に見覚えがあつた。

というか、よく知っている気さえた。

とても近くて、他人とは思えない人物。

（……私？）

そう。目の前にいる女性は、クラウにとってもよく似ている。身長はほぼ同じくらいだが、女性としてより完成しており、クラウがこのまま成長し、外見と内面が釣り合うような年齢になつた際の姿を見ているようだ。

（私、周りからはこんな風に見られてたんだ。それは怖がられても仕方ないよね……）

目の前の女性に対して、クラウは近寄りがたい印象を受けた。それはつまり、自分も周囲に同様の印象を与えていた事になる。自分が周囲から、どう見られているかの自覚はあつたつもりだったが、こうして具体的に突きつけられるとへこむものがある。

「あ……」

クラウが内心でへこんでいると、女性が短く声を上げた。

「？」

クラウは何だろうと女性の方を見るが、彼女は口を開き、しかし何も言わずに閉じてしまった。

(もしかして……)

クラウはこの状況を知っている。よく知っている。

それは、何か言いたいけど言えない時の自分と同じだったから。

女性の表情は変わっていない。良く言えば平靜で、悪く言えば不愛想だが、心の中で葛藤していて、しかし表情に出していないだけなのだ。

(私がへこんでるのに気付いて、心配してくれてる?)

きつとそうなのだろう。ひよつとしたら、本を手に取りろうとしたのを止められて、それでへこんでしまったのだと、勘違いしているのかもしれない。

クラウが彼女の立場だったら、そう考えると思うから。

(見た目だけじゃなくて、思考回路も似ているのかも)

そう思うと、彼女とは上手く話せそうな気がした。

「……この本、大事なものなんですか?」

先ほど、『それは読まない方がいい』と言われた本の背表紙を指して訊ねた。出来るだけ明るい声と表情で。

すると、女性は少しだけほつとした表情を浮かべて答えてくれた。

「此処にある本はすべて大事。その本には私の事が書かれているから、読まれると少し……

…恥ずかしい」

微妙にはにかむような表情を浮かべ、彼女はそう言った。

些細な変化だ。注意深く見ていなければ見過ごしてしまいそうな。

だが、その些細な変化は、彼女にしてみれば精いっぱい自己主張な訳で、そう思うと、クラウはたまらなく愛おしい気持ちになった。

相手は見た目も、実際に生きた時間も、明らかに上ではあるのだろうか。

「判りました」

そう言つて、クラウは件の本に背を向けた。後ろ髪を引かれるタイトルだったが、機会があれば何時か読めるかもしれないと自分を納得させた。

「……………」

「……………」

向かい合ったものの、互いに無言で見つめ合ってしまう。

『お見合い』の続きに来ただけで、本当にお見合い状態になってちゃ駄目だよね……

人見知りはお互い様 ならば、会いに来た方が積極的に話しかけるのが筋だろう。そう言い聞かせて、クラウは対話に臨んだ。

「初めまして。私はクラウ・P・ブラン。あなたに認めてもらうために来ました」

「ええ。知ってる」

やはり、こちらから話しかければ答えてくれる。少しぶっきらぼうな気もするが、それは緊張によるもの。判りづらいが、微妙に目が泳いでいるから。

「……誰かと話すのは久しぶりで、上手く話せなかったら、ごめんなさい」  
女性は一度、そこで口を閉じたが、クラウは察して続く言葉を待った。

「――私はジェノクラウエ。かつて、〈ギヤクサツソウリュウ〉と呼ばれたもの」

最初に彼女を見た時から気付いていた。

私が。パートナーに選んだ相手だと。

此処はロゼットから聞かされていた〈想刻の間〉。いわゆる仮想空間で、〈機獣少女〉がMBデバイス――正確には内部の機獣のコアの欠片――と対話するための場所だそう  
だ。

つまり、この大図書館はジェノクラウエの心象風景のようなものなのだろう。

とても共感が出るし、共有したい。

読書好きのクラウが、そんな仲間意識のようなものを感じていると――

「率直に言う。私はあなたとの契約に異存はない」

ジェノクラウエの化身――仮想人格とも呼ぶべき、この空間内におけるアバターの女性  
が言った。

「でもその前に、解消しておきたい問題がある」

「問題……?」

その言葉に、クラウは緊張の色が隠せず、繰り返した。

「それが私と衝突を起こした。それが原因となって今、あなたの身体は現実で、あなた  
の仲間達と戦っている」

「……それって――」

その状況をクラウは知っている。知らないまままでいられなかった。

「そう――〈カタストロ〉に意識を奪われていた時と同じ」

ジェノクラウエの言葉は淡々としている。糾弾されている訳ではないのだが、受け取る  
人間の気持ち次第で、それは如何様にも感じ方が変わる。

特に、自分を責める傾向がある人間ならば、やはり糾弾されているように感じてしまう。

「勘違いしないで、あなたを責めている訳じゃない」

「でも……」

「悪いのは、あなたじゃない。悪いのは〈カタストロ〉——そして、それが私の解消しておきたいもの」

「……………どういう意味、ですか？」

訊かなくても理解出来ていた。

それでも訊かずにはいらなかった。

自分の理解が的外れだったと否定してほしかったのだ。

だが、そんなクラウの淡い期待は裏切られる。

「あなたの中に〈カタストロ〉の欠片が残っている」

ジェノクラウの仮想人格は、はっきりと断言した。



少女達の戦いが続く演習場の様子を見守りながら、管制塔にいるロゼットは中断してしまっていた問いを、改めて投げかけた。

「クラウが〈カタストロ〉に取り付かれてたって、どういう事？」

「どうって……………そのまんまとしか」

問われたアサトにしてみれば、やみひめとツバキに同行した際に一度、遠目に見ているだけだ。その当時の事を、覚えている限り伝えると、ロゼットは暫し黙考した後、この場にいる残りの一人に訊ねた。

「タオエン、あなたの星でも〈カタストロ〉は目撃されていたんでしょう？」

ロゼットに訊ねられたのは、アサトと同年代くらいの少女だった。見た目通りなら十六、七歳といったところだろう。無表情で美少女なのはカナコと同じだが、彼女が静謐な印象なのに対し、タオエンと呼ばれた少女は伶俐な印象が強い。

緩く波打つ銀色のセミロング。どこか神秘的な色を湛えた金色の瞳。これら特徴的な容姿も相まって、見る者にミステリアスな印象を与える少女だ。

タオエン・ファフロウ。

ベアトリーチェの姉であり、妹は猫のような耳と尻尾を持っているが、タオエンのそれは狐を思わせる。

地球から来たアサト達と同じく、この惑星ゼヘナにおいては異邦人である。

「はい。我々は〈ベネディクト〉と呼んでいましたが、同種のもんです」

「アサト君が言うような事例はあった？」

「願いを叶える対象に対し、欲望を素直に開放させるために理性を薄れさせるような、精神面での干渉であれば確認されています」

ロゼットの問いに答えつつ、タオエンはアサトを一瞥し、

「ですが、橘たちばなさんが言われたような、物理的接触により対象の意識を奪ったり、対象の外見を変化させたという話は、聞いた事ありません」

と、付け足した。

「そうなると、あの〈カタストロ〉が特殊なのか——」

「もしくは、ブランさんに何か理由があるか——ですね」

考え込むロゼットと、いまいち何を考えているのか読めないタオエンを尻目に、アサトは演習場の戦いに視線を戻した。



自分の中の〈カタストロ〉は、やみひめの不可思議な能力で分断された。

クラウはそう聞かされていた。

意識を奪われていた間の記憶は、断片的にはあるが取り戻しているので、自分でもなんとなく覚えている。

クラウの中に〈カタストロ〉はもういない——そのはずだ。

しかし——

「あなたの中に〈カタストロ〉の欠片かけらが残っている」

ジェノクラウエの化身の女性は、そう断言した。

「……………」

否定しようとして、しかし出来なかった。

思い当たる節ふしはある。

ゼヘナに転移する直前、あの忌まわしい姿になった。この手で友人を手にかけた、黒く、  
まがまが  
禍々しい姿に。

(私の中に〈カタストロ〉の欠片が残ってる……)

この星に来てから、自分の中に『異物』が存在する感覚はあった。意識しないようにしていたが、指摘されれば、もう認めるしかない。

「でも、どうすれば……」

認めたところで、クラウには対処法が判らない。もう一度、分断してもらおうにも、やみ

ひめは此処にはいないのだ。

「こうすればいい」

不意にジェノクラウエの仮想人格が手を伸ばし、クラウの肩を払うような仕草をした。あたかも、肩に付いていたゴミでも払い落とすように。

すると――

「――きゃっ」

短い声――悲鳴だったのかもしれない――が背後から聞こえた。クラウが振り返ると、其処にいたのは小さな子供だった。まだ小学校にも上がっていないような年齢に見える。性差に乏しい年頃な事に加え、容姿や服装もどちらともとれるので、男女の区別はつかない。

その子も状況がつかめていないのか、尻餅をついた格好のまま、きよとんとクラウを見上げている。

「あの、この子は？」

「それが〈カタストロ〉」

「……………へ？」

「正確には欠片<sup>かけら</sup>だけど。仮想空間<sup>こくこ</sup>ではこういう事も出来る」

と、仮想人格の娘は事もなげに言った。

つまり、先の仕草で一つで、クラウの中の〈カタストロ〉を追い出した――もしくは、視覚化したという事だろう。

視線をジェノクラウエから子供――〈カタストロ〉に戻す。

「……………」

「……………」

目が合ったが、どちらも無言。

クラウにしてみれば、自分の意識を奪って人を傷付けた元凶であり、この星の人々とっては天敵<sup>てんてき</sup>なのだが、目の前の幼い子供の姿を目の当たりにすると、敵意や悪意といった感情が湧いてこない。

むしろ――

（か、可愛い…………）

中性的な容姿に、純真無垢なあどけない表情が、クラウの中の何かを刺激する。

「……………」

不意に幼子<sup>おきなご</sup>が立ち上がり、クラウに向かっておずおずと手を伸ばす。警戒すべきだと判っている——が、クラウはその手を払わなかった。不安げにこちらを見上げる表情に、危険を感じなかった。むしろ、無慈悲な対応をする方が、心が痛んでしまっただろう。

もし、そう思わせるのが〈カタストロ〉の作戦だとしたら、まんまと術中<sup>は</sup>に嵌<sup>は</sup>まっている事になるのだが。

「……………」

幼子の姿をした〈カタストロ〉は、クラウの服の裾<sup>すそ</sup>を掴<sup>つか</sup>んで身を寄せるだけで、何もしてこなかった。ただ無言で、クラウを不安そうに見つめている。

その光景は、母親に捨てられる事を恐れている子供のようにも見えるが、クラウには不思議と、姉の心配をする弟のようにも見えた。

(この子、ひよつとして私を心配してくれてる……?)

どんなに見つめても、〈カタストロ〉は無言でクラウを見つめ返すだけだ。



「トーレ・アルコ——頭<sup>エグゼキュート</sup>れよ！」

ベアトリーチェが叫び、両手に持っていた小太刀<sup>シヨート・ブレイド</sup>をマントに仕舞うと、何時<sup>いつ</sup>の間にも持ち替えたのか、その右腕には銃が握られていた。二連装の短砲<sup>シヨート・バレル</sup>身で、ライフルより銃身が短いそれはカービンに分類される。射撃戦装備である〈トーレ・アルコ〉の兵装のうち、もつとも低威力だが、もつとも使い勝手が良い。

第一の矢〈フエーデ・フレツチエ〉。

「援護射撃、いづくよー！」

ベアトリーチェが言うと、通信機越しにそれを聞いたであろうやみひめとツバキがこちらを一瞥<sup>いちべつ</sup>し、左右に分かれ、黒いドレスに身を包んだクラウだけがその場に残された。

「射線上に障害なし」

右の脇<sup>わき</sup>をがっちりと締め、左手は砲身<sup>バレル</sup>の下に添<sup>そ</sup>える。その堂に入った姿は、年端もいかぬ少女でありながら、ベテラン兵士のそれを思わせる。

明らかに魔女を思わせる格好とは、やはり不似合いだが。

「モード・パストレー——更<sup>ウン・ウルテリオール・サルウィツァ</sup>なる救<sup>トリガー</sup>いを！」

発声と同時に引き金を引くと、〈フエーデ・フレツチエ〉の上下にある二つの砲口から同時に光が生まれ、それは一条の光線となって放たれた。通常は単発で撃ち出される『弾丸』

だが、この集束モードでは高出力の『光線』として照射される。

クラウドは当然、回避行動をとるが、ベアトリーチェは、ちよいと姿勢を変えるだけで射線を変えられる。逃げる標的を追いかけてカービンの銃口を動かす――が。

「にやっ!?」

ベアトリーチェがおかしな悲鳴を上げた。

だが、致し方ない。クラウドは飛行と呼んで差し支えない動きで、フェーデ・フレッチエの照射を紙一重でかわしつつ、高速でこちらに向かってくる。

驚異的な機動だ。

確かに、回避が困難な攻撃であれば、被弾覚悟で向かっていった方が被害は最小限で済む。それは理に適った判断だ。

しかし、咄嗟に、しかも躊躇なく出来るものではない。

「うわあ……ヤバいかも」

言葉とは裏腹に、口調から危機感を感じられない。むしろ、ベアトリーチェの表情は楽しそうに見える。

「モード解除!」

照射を中断し、音声入力によるモード変更。射撃を集束から単発に切り替える。

攻撃がなくなった事で、クラウドは残りの距離を一気に詰めるべく更に加速する。そのスピードの前に、十数メートルの距離などゼロに等しい。

しかし、ベアトリーチェは片手で構えたフェーデ・フレッチエの引き金を引かない。  
 (まだ……まだ早い……)

クラウドの姿が眼前に迫る。凶器そのものの爪が光を反射し、自分の命を刈り取ろうとしている。

(もうちよつと……もつと来い……!)

極限まで高められた集中力により、一瞬が何十倍にも感じられる。スローモーションで迫る黒い死神の爪が振り上げられた瞬間――

「――ッ!」

「――!?!」

一瞬ですれ違う二人。ベアトリーチェのショートヘアを風圧で揺らし、クラウドは遙か後方に着地した。

「ベアトリーチェ! 今、どうなったの!?!」

クラウドと入れ替わるように――追いついたのだろう――現れたやみひめが、興奮気味に訊ねた。傍から見れば、ただクラウドがベアトリーチェを掠めただけに見えただろう。

「すれ違う直前に、ベアトリーチェさんの射撃がブランさんの手甲に当たって、軌道を変えたんですね」

答えたのは、やみひめに続いて追いついたツバキである。こちらは名うての〈機獣少女〉だけあって、落ち着いている。

「ツバキちゃん、正解」

「すごい！ 西部劇のガンマンみたい！」

やみひめは戦う力はあるようだが、戦い方は素人に産毛が生えた程度だ。だからこそ、こういう素直な反応が出来るのかもしれない。

「えへへ。ありがとう、やみ子ちゃん。もっと褒めてくれていいんだよ？」

『——ベアトリーチェ、あまり無茶な事はやらないでください。今のは肝が冷えましたよ』  
更なる賛辞を要求しようとしたところに、耳元の通信機から姉の声が届いた。管制塔で見ているであろうタオエンだ。通信越しでも淡々としているため、普段と声の印象は変わらない。

「タオ姉は心配し過ぎだよ」

『妹を心配しない姉はいませんよ。まったく……無茶はほどほどに』

「はい！」

言うだけ無駄だと判っているのだろう。タオエンは、やや投げやりに通信を終えた。

「今のタオエン、心配してたんだ」

「判りかねますね」

やみひめとツバキは小声で話しているようだが、ベアトリーチェには丸聞こえだった。大きな耳は飾りではないのだ。

「二人とも、まだクラクラはやるつもりみたいだよ」

クラウの視線が改めてこちらに向いたのに気付き、ベアトリーチェが臨戦態勢を促す。

「ひよつとして、『クラクラ』ってクラウの事……？」

「ちよつと、言いにくくないですか？」

「え？ そうかな？」

微妙な表情のやみひめとツバキに、ベアトリーチェは首を傾げた。



「こちらの服の裾を掴み、純真無垢なあどけない表情で、無言で見つめてくる幼い子供——ジュノクラウエの仮想人格が言うところの、クラウの中の〈カタストロ〉の欠片。」

それをクラウドは、複雑な気持ちで見つめ返していたが、意を決して訊ねた。

「この子を、どうしろと言っんですか？」

「私と契約して〈機獣少女〉としての力を使えるようになったら、あなたは強くなる。そうなった時に、また〈カタストロ〉に意識を奪われれば、手が付けられなくなる」

ジェノクラウエの仮想人格が、右の掌てのひらを上に向ける。すると、何もない空中に、ノートパソコンのモニターくらいの画面が現れた。アニメやSF映画に登場する、空中投影モニターのような。そこには、黒いドレスを身に纏いまと、やみひめ達と戦っているクラウドの映像が映し出されている。

通常空間——仮想空間ではない、現実の映像なのだろう。

「本当に私が……」

知らされていたとはいえ、自分の身体からだが自分以外の意思で動いている光景を実際に見せられると、ショックを隠しきれない。

しかも、かなり強い。恐らく、現実のやみひめ達は、クラウドを殺さないように戦ってくれている。だが、それを考慮しても、やみひめ、ツバキ、ベアトリーチェの三人を同時に相手にしているのだ。普通なら数で押され、取り押さえられている。

「……………」

画面の中では、ベアトリーチェが撃った散弾を撒き散らすミサイル——指向性散弾地雷弾頭だろう——でも無傷の自分が、カナコにターゲットを切り替えていた。両手の手甲てこうから伸びた爪と、カナコのカタナによる激しい応酬は、しかし映像が消えた事で中断してしまった。

「これで判ったはず。不安要素を抱えたままのあなたとは契約を結べない」

仮想人格の言う通り、〈機獣少女〉となる事で映像以上の戦闘力を得て、暴走してしまえば大惨事を招くだろう。それを未然に防ごうとするのは、力を持つ者の責任だ。

「その〈カタストロ〉の欠片かけらは、ほとんど思念体に近い。あなたが望めば、完全に消滅させられる。〈想刻の間そつこくの間ま〉は、そういう場所だから」

それが、先ほどのクラウドの問いに対する答えなのだろう。

〈機獣少女〉になりたいのなら、自分と契約したいのなら、この子を消せ——と。

幼子おきなこの姿をした〈カタストロ〉の欠片に視線を向ける。クラウドと仮想人格の会話は聞こえているはずだし、理解も出来ているはずだ。

だが、何も言わない。純真無垢なあどけない表情のまま、クラウドを見つめるだけだ。自分を消せと言われているにも関わらず、恐怖の色を浮かべていない。

「……………」

その瞬間、クラウは確信した。

〈カタストロ〉の欠片は、やはり不安など感じていない。ただ、自分を心配してくれているだけなのだ。

「——決めました」

仮想人格の娘を正面に見据える。細身のダークスーツに身を包んだ麗人は、無言で続きを促す。

「私の中の〈カタストロ〉の欠片は——消しません」

クラウの言葉に、ほんのわずかだが、初めて幼子の表情が動いた。



目は口ほどにものを言う。

これは戦闘においても同様だ。視線の動きで相手の狙い所が判るし、達人になれば相手の行動を先読み出来る。そして、表情にも同じ事が言える。気持ちは表情に出て、それから相手の状態を窺う事が出来る。余裕があるのかないのか。この局面は想定内なのか否か。それによって、相手の作戦や切り札の有無も予想が可能だ。

だからこそ、無表情である事は戦場では有利になる。

何を考えているか判らない相手というのは、非常に戦いにくい。

〈機獣少女〉の敵は〈カタストロ〉だが、訓練や親善試合などで対人戦闘を行う事はある。

カナコはそれでも無敗なのだが、今、自分と戦ってきた〈機獣少女〉達の気分が、少しだけ判った気がしていた。

(……やりにくい)

獣の爪を思わせる両手の手甲による、斬撃と突き。こちらのテンポを崩すように時折繰り出される、刈り取るような回し蹴り。それらが驚くほどの速さでカナコを襲うのだが、それ以上にクラウ・P・ブランが厄介なのは、無表情である事だ。

完全な『無』。

故にまったく先読みが出来ない。

クラウの戦闘スタイルは、カナコと非常に近い。速さを活かした怒濤の連続攻撃で相手を圧倒する、速攻タイプ。同じタイプ同士の戦いとなれば、技量の差が結果に直結する。

しかし、カナコとクラウの技の応酬は互角だった。一進一退を繰り返し、同じ動画を繰り返し再生しているような錯覚に陥りそうになる。

技量に差がなければ、あとは根比べだ。

いや、カナコに殺意がない分、わずかにクラウが有利かもしれない。相手を気遣いながら戦うというのは、相当のストレスだ。MBジャケットによって保護されているとはいえ、絶対ではない。そして、クラウは手加減して戦える相手ではない。

さらに言えば、速攻タイプのカナコに持久戦は向かない。彼女が後方に下がっていたのは、この場の指揮を任されているからというのもあるが、実際の理由はそれだった。

(本来なら、ツバキ達に任せるか、連携すべきだろうけど)

ツバキ達も消耗している。これまでの戦いぶりを見れば、連携も気が進まない。味方の攻撃で怪我をするほど馬鹿馬鹿しい事はない。頃合いを見て、回復した状態で交代するのが最善だろう。

しかし――

(なんだろう、この感覚は……)

身体は疲労を感じているはずなのに、気持ちは充足している。

(全力で戦えているから?)

カナコに殺意はない。だが、手加減もしていない。そんな余裕もない。

クラウの左右の爪が交互に迫り、時折、回し蹴りが放たれる。一連の流れは淀みなく、とても綺麗だ。それらをかかし、時にカタナで捌き、こちらも斬撃を放つ。

それをひたすら繰り返す。

こんなに全力で戦ったのは初めてかもしれない。

《機獣少女システム》は完璧で、ローテーションによる無理のない待機スケジュールが組み、《カタストロ》への対処もマニュアル化されている。危険が伴う仕事ではあるが、すでに《カタストロ》との戦いは日常に組み込まれ、緊張感は失われつつある。だからこそ、カナコのような実力者になると、全力で戦う機会ほぼ失われる。

「――ふっ」

短く息を吐き、カタナ型のMBデバイス《スサノオ》を横に薙ぐ。一瞬遅れて、クラウの両手の爪がすべて宙に舞った。

続けて、身を深く沈める。頭上を通過したのは、クラウの両肩が展開し――どういう構造なのかまるで判らない――顔を覗かせた連根の切断面みたいな筒から撃ち出された弾丸の雨。バルカン砲というやつだろう。

咄嗟にかわしたが、反射的に身体が動いただけで、最初から飛び道具だと認識していた訳ではない。

立ち上がり、その勢いで追撃をかける。武器は破壊した。ならば畳みかけるのみ。

「――ッ!?!」

だが、氣勢をそがれた。すでに爪を破壊されたはずの手甲に、新たな『爪』が生え、（スサノオ）のすくい上げからの一閃を受け止めていた。

よくよく見れば、それは先ほどの爪とは違う。長さは倍近く、カナコの（スサノオ）とほぼ同じ。オレンジ色の光の剣といった印象で、手甲の先から生成されているように見える。

隠し武器である。

カナコは大きく後方に跳んで、距離をとって着地。他にも隠し武器があるかもしれない以上、不用意に密着し続けるのは危険だ。

「……………」

右足を前に出し、左足は後ろに引く。半身になって腰を落とし、見えない鞘さやに納刀するように、（スサノオ）を腰の左側に移動させる。

それは居合いあい、もしくは抜刀術ばつとうと呼ばれる構えだ。

構えた瞬間、カナコの背後に数本のカタナが現れた。やみひめが見せた能力と似ているが、あくまで機力きりよくの応用による技術であり、カタナに見えているのも、『そう認識しているからカタナに見えている』だけだったりする。

「——ッ！」

だが、それでも『威力』に変わりはない。カナコがイメージを描くと、機力で編あまれた数本のカタナは飛翔し、クラウに殺到した。

対するクラウには、やはり奥の手があった。先ほど生成した光の剣を、投げナイフのように撃ち出した。しかも、両手を掲げ、左右交互に。

二人の中間で、次々に互いの飛び道具が激突していく。どちらも要はエネルギーの塊かたまりだ。ぶつかり合ったエネルギーは音と光と熱に変換され、すぐに霧散する。

クラウの姿が見えると、彼女は即座に光の剣を生成し、背中の羽根を展開、あの爆発的な加速で迫ってくる。カナコも応戦し、怒濤ラッシュの連続攻撃をかわし、捌さばき、時に受け止め、反撃に転じる。

その極限状態の中、カナコは背筋がゾクゾクする感覚を覚えていた。ギリギリの命のやり取りに、たまらなく『生』を実感する。

（この感覚——悪くない……ッ！）

やがて剣戟げきの応酬が終わり、仕切り直すように二人が距離をとった。息が切れている——が、疲労が心地良い。

クラウは無表情のままだが、肉体は十代の少女のものだ。動きが最初に比べ、やや精彩を欠いている。

「はあ、はあ………さあ、続けましょう。まだ終わりじゃないでしょう？」

呼吸を整え、挑発するように不敵な笑みを浮かべるカナコに、クラウはやはり無表情のまま、無言で構えをとって返答とした。

カナコとクラウの戦いを見守っていたやみひめ、ツバキ、ベアトリーチェの三人は、完全に加勢に入るタイミングを失っていた。下手に介入すれば、カナコの逆鱗げきりんに触れてしまうのではないかと思わせる、鬼気迫る雰囲気だからだ。

「……ねえ、あれって」

「はい。完全にランナーズ・ハイになっていますね」

「カナコ、こわーい」



「不安要素のある相手と契約は結べない」

〈カタストロ〉の欠片かけらを消滅させる事を拒否したクラウに、ジェノクラウエの仮想人格は言った。

責める口調ではない。ただ、それが決まりだと告げているだけのように聞こえる。

現在、通常空間ではクラウが暴走している。原因は彼女の中に残った〈カタストロ〉の欠片かけら。今はまだ抑えられるが、〈機獣少女〉の力を手にして、また同じように暴走すれば、手が付けられなくなる。仲間を傷付け、殺してしまうかもしれない。そうなれば、命を奪う事ではか、クラウを止められない。誰も幸せにならない。

「力を持つていいのは、それを制御出来る者だけ」

力ちからに溺れた者は、周囲を巻きこんで破滅する。

「力には責任が付いて回る。何に固執しているのか判らないけど、暴走の危険が大きいあなたに、私は力を与えられない」

それは責任放棄だから。

「私じゃなくても、あなたと契約するMBデバイスはいないと思う。〈機獣少女〉になるの

は諦め——」

「暴走の原因は私です」

仮想人格の言葉を遮り、彼女との契約を望む少女は、そう断言した。

無言で続きを促すジェノクラウエの仮想人格に、クラウは重い口を開いた。

「きつかけは確かにこの子です。でも、そもそもの暴走の原因は私だったんです」

「どっついう事？」

『カタストロ』——この星ではそう呼ばれていますけど、別の星では『祝福』と呼ばれていたそうです」

起動試験の直前、クラウはタオエンにこの話を聞かされた。あれは本来、誰かの願いを叶える存在だと。結果的に不幸に見舞われてしまう結末がほとんどらしいが、それは安易に願いを叶えてもらおうとした事への報いなのではないかと、クラウは感じた。

どうしてタオエンが、あのタイミングでそんな話をしたのか、ようやく判った。彼女はクラウの中の〈カタストロ〉の欠片かけらに気付いていたのだ。

「誰かの願いを叶える存在。この子も、ただ私の願いを叶えてくれようとしていただけ」  
道具そのものに善悪はない。道具がなければ起きなかった悲劇はあるが、結局、悲劇を起こしたのは人間だから、道具が悪いというのは責任転嫁だ。

それは〈カタストロ〉も同じだ。ただ叶えるだけの存在に、善悪の判断は出来ない。叶えてほしいと願った側が責任を負わなくてはならない。

「私にも願いがあります。叶えてくれると言われて断ったけど、きつと、本心では拒んでいなかっただと思えます。だから、この子は私の意識を奪って行動してくれた」

クラウに罪悪感を感じさせないために。

膝立ちになり、幼子の姿をした〈カタストロ〉の欠片と視線を合わせる。

「ごめんね……ありがとう」

謝罪の言葉と感謝の言葉。どちらも言い出したらキリがない。

だから、一言ずつにありつたけの気持ちを込めた。

「私はもう、大丈夫だから」

誰かに願いを叶えてもらわなくていい。

だから——

「……………うん」

続く言葉は必要なかった。

純粹に誰かの願いを叶えるための存在は、その一言を最後に姿を消した。純真無垢なあどけない表情に、満ち足りたような笑顔を浮かべて。

「c」

ふと、てのひら掌てのひらに固い感触があった。手を開いてみると、握っていたのはシンプルなデザインの指輪リングだった。宝石の類たぐいが付いたタイプではなく、リングそのものが水晶クリスタルを思わせる石で出来ている。

恐らくは、あの子が残したものだ。

「……………」

それを両手で胸に抱き、クラウドは祈るような姿勢で、消えてしまった〈カタストロ〉に想いを馳せた。

今ならばつきりと判る。〈カタストロ〉の欠片かけらが残ったのも、地球から転移する直前にあの姿になったのも、通常空間で本来の身体からだが暴走してしまっているのも、全部、自分の中の罪悪感が罰を求めた結果だ。それが行き場を求めて、暴れてしまった。

罪の意識は今も消えない。

だけど、闇雲に自分を責めても、あの子に心配をかけるだけだ。もう消えてしまったけど、想いは胸に残っているから。

犯した罪は、別の事で償つぐなう。

（そのために、私は〈機獣少女〉になろうと思ったんだから——）

クラウドは立ち上がり、この場に残ったもう一人と相對する。

「私にもう、不安要素はありません」

まっすぐにこちらを見返す仮想人格の姿に、鏡を見ているような気分になる。特徴が似ているだけで、今まではそう思わなかったはずなのに。

「今の私となら——契約してくれますか？」

「構わない」

「……………えっ？」

驚くほどあっさりと了承を得られてしまい、クラウドは間の抜けた声を漏らしてしまう。

「構わないと言った」

「え、でも…………」

「もう確認しておくべき事はない。あなたの覚悟はよく判ったから」

「そ、そうなんだ…………」

この仮想人格は、ルールには厳しいけど、ルールを守ってさえいれば口うるさい事は言わないタイプなのかもしれない。割り切りが良いというか。

「あとは最後の工程を済ませれば契約は完了」

そう言うと、クラウドの目の前に、しなやかな手が差し出された。彼女が手の甲をこちらに向けている。

「？ どうすればいいんですか？」

「契約の証を」

「証？」

「口づけ」

それはつまり、中世の騎士が女性にするような行為で――

「……ほ、本当に？」

「……………」

クラウの問いに、仮想人格はこくりと頷く。うなず

(……あれ？)

そこで気付いた。無表情のままだと思っていたが、心なしか彼女が、そわそわしているように見える。注意深く見なければ判らないが、ほんのわずかに、頬ほおに赤みがさしている。

(もしかして、彼女も照れてる？)

そうだ。この仮想空間に来てすぐに気付いた。

彼女も自分と同じ人見知りだと。

途中からそんな印象はなくなっていたが、気を張っていたのかもしれない。

そう思うと、途端とたんに彼女が、また可愛らしく見えてきた。

「よろしくね――ジェノクラウエ」

もう照れているのも馬鹿らしい。クラウはなんでもない風を装って、彼女の手の甲に口づけし、パートナーとなる相手の名前を呼んだ。



現実空間ではカナコとクラウの激闘が続いていた。

すでにどちらも体力的に限界のはずだ。

カナコも危険だが、本当に危険なのは、自分の意思で戦っていないクラウだろう。肉体の事などお構いなしで戦っているとすれば、限界を超えた途端とたんに、クラウの身体からだが死に至る可能性がある。

「やみひめさん、ベアトリーチェさん……いざとなったら、無理矢理にでも二人を止めますよ」

「う、うん……………」

「あそこに飛び込むのは嫌だなあ……………」

死地に赴くような表情のツバキに対し、やみひめは意を決して、ベアトリーチェは嫌そ

うに答える。

無理もない。百戦錬磨のベテラン兵士でも、遺書を書かせてくれと懇願するだろう光景なのだから。

「——あ」

不意に、やみひめが声を上げた。戦闘が止まったのだ。クラウドが静止し、カナコは戦闘態勢のまま警戒している。

すると——

「MBジャケットが変わった……？」



「なんだ……？」

「MBジャケットのデザインが変わりましたね」

演習場の様子をモニターしている管制塔、その管制室で戦闘——本来は起動試験のはずだったのだが——の様子を見守っていたアサトとタオエンは、クラウドの変化を目の当たりまにしていた。

大きな変化があった訳ではない。特に注意して見なければ、MBジャケットに大して興味のない者なら、気付かないかもしれないような変化である。言わばマイナーチェンジに近い。ドレスも、爪も、ウイング・ユニットも、大きくは変化していない。

だが、よく見れば顔の両側面に、放熱板のようなフィンが追加され、腰にはドラゴンを思わせる多関節の尻尾のようなパーツが見られる。恐らくは姿勢を安定させるためのスタビライザーのような機構だろう。

しかし、それでも劇的にシルエットが変わった訳ではない。むしろ、変わったのは色の印象だろう。黒を基調に、白のアクセントという配色は変わっていない。

変わっていないはずのだが……不思議と変化したMBジャケットは、『白い』印象がある。

前述の通り、黒と白の配合具合は変わっていない。それでも見る者に白の印象を与えるのは、装着している少女の存在によるものかもしれない。

だから、ロゼットは新たなMBジャケットをこう表した。

「——ラインハイト……」

純粹で無垢なるもの——そんな意味を込めて。

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十一話をお届け致します。

正直——大変でした。

早めに取りかかったにも関わらず、集中力が続かない事この上なく、書く内容は決まっているのに、筆が進まないのなんの。

まあ、そんな事はどうでもいいとして——戦っております。

そして、三十ページ超えです。

やはり、三人称小説でバトルとドラマを両立させようとすると、ページ数を食ってしまう……。

嗚呼！ 美少女が百合合ったり、ラブコメしたり、病んだりするだけの、萌え萌えキュンな小説が書きたい！ もうバトル書きたくない！

……まあ、しばらくしたら、また書きたくなるんだろうけども。

それでは謝辞を。

クラウやロゼットなどに関するチェックをお願いしている紙白さんと、ベアトリーチェの射撃装備〈トーレ・アルコ〉のチェックをお願いしている enigma9641 ちゃんに感謝を。年末のなにかと慌ただしい時期にも関わらず、今回も本当にありがとうございます。

そして、『ここまで読んでくださった』あなた』に感謝を。

これで清々しく年を越していただけのなら、苦勞の甲斐もあるというもの。来年もよろしくお付き合いください。

2016 / 12 / 28 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る